

リサイクル 関東以北での業務拡大めざす**メタルドゥ 東京支店のヤード4割拡張**

現地同業者との協力体制強化し回収力向上に注力
 リサイクラー大手のメタルドゥは3月から東京支店(江東区新木場)のヤード面積を約4割拡張する。スクラップの取扱い能力を増やし関東以北での業務拡大をめざす。同エリア内の現地同業者との協力体制強化も並行して行い、回収力の向上にも注力する。同支店は関東以北の営業・マーケティング拠点にもなっており、今後は各スクラップ発生元(特殊鋼、レアメタルユーザーなど)のニーズを探り、最適なリサイクル計画を提案することで集荷量を増やしたい考えだ。

集荷力に成長幅残す関東で事業安定化めざした先行投資
 既存ヤードに隣接する土地を新たに借り入れることで、現在の約400坪から約550坪に拡大。2月から現場事務所の移動工事などに入り、3月1日の稼働開始を予定する。2011年9月に現体制で操業開始以来、スクラップの取扱量が順調に増え、営業スタッフ(東京は6名)の育成も一段落。関東圏での集荷力には多くの成長幅を残すことから、設備投資を先行して行い長期的な事業安定化をめざす。処理能力を増やせば、回収したスクラップの検品、現金化の高速化も実現できる。設備を充実させることで、スクラップ発生元などがヤード見学を希望する際も1st物流センター

1~3月のNi、Co相場予測 景気面の好材料で上昇局面

年明け以降ニッケル、コバルトとも国際相場が上昇局面を迎えており、まだ世界経済には先行き不透明感がつきまとうが、昨年末から懸念されたアメリカの「財政の崖」はフタを開ければ経済への影響が軽微だったなど、景気面での好材料が両品目の価格にも反映された。今年1~3月のニッケルとコバルトの相場予測についてメタルドゥの山類敏彦氏(代表取締役・専務)、片山こころ氏(海外営業部部長代理)にそれぞれ寄稿してもらった。

ニッケルは需要低迷、供給過多などが値上げの重しに

昨年10月のニッケル相場は、米国連邦準備制度(FRB)によるQE3(量的金融緩和政策の第3弾)の発表などで18,840ドル/t(8.55ドル/lb。以下同じ)まで上昇した。しかし、世界的な需要減退とファンド筋の利益確定売りなどで同月中には16,000ドル台/t(7.26ドル)まで反落。下落は11月中旬に15,880ドル(7.2ドル)で底打った。直近の相場は中国製造業PMI(購買担当者指数)上昇、「財政の崖」の回避期待などで反発し17,000ドル(7.71ドル)台で推移している。

今年1~3月の相場は16,000~18,500ドル(7.26~8.39ドル)と予測する。ヨーロッパ、アメリカ、中国の景気刺激策、長期的金融緩和などが変動要因になるが、需要の低迷、供給過多、LME在庫の増加傾向などが上昇の重石となり、変動幅は比較的狭いレンジで推移すると思う。

400系への代替などでステンレス向け需要はさほど伸びず
 ニッケルの需要面は、ステンレス(SUS)生産が世界経済低迷により減産調整中。仮に今年以降の世界生産が7~

(大阪府大阪市)、2nd物流センター(兵庫県神戸市)まで遠出することなく東京で案内でき利便性向上にもつながる。

発生元ごとの最適なリサイクル計画、メリットを提案

関東以北といっても北海道まで含めれば広範囲におよぶため、発生するスクラップ鋼種も発生元ごとにさまざま。そこで発生元へのアプローチ、御用聞きなど幅広いマーケティング活動を行うなかで、最適なリサイクル計画、リサイクルのメリットを提案し集荷量を増やしていく。発生元としては、これまで産業廃棄物として処理されていたスクラップでも、品目によっては有価物として買い取っていく。それがたとえ少量でも各地から少しづつ調達できれば鋼種ごとに仕分けし、まとまりリサイクル原料として特殊鋼各社に一括納入できる。

手荒な回収せず同業者間の摩擦を抑えた集荷体制整える

近く東京支店のスクラップ月間取扱量(ヤード処理実績ではなく同支店の全扱い量)を足元の約700tから1,000tまで引き上げる。景気動向の不透明感が強く先行投資にはリスクをともなうが、周囲の土地にはまだ余裕があり、仮に大手スクラップ発生元と回収契約を交わすことができれば将来的にはその関連企業との取引も期待できるなど、稼働状況をみながらもう一段の拡張も視野に入れている。

処理能力が増えて「手荒な回収はしない」(藤田國廣社長)といい、関東圏のリサイクラーとは協力し、同業者間の摩擦を抑えながら集荷体制を整えたい考えだ。

8%ずつ成長したとしても、400系(クロム系SUS)への代替などで、SUS分野でのニッケル消費はさほど伸びないと聞く。供給面は、世界の鉱山開発は低調ではあるが、生産規模はいぜんとして増加傾向にあり供給過多が続いている。ただ、中国の一部ニッケル製錬所は生産ストップや大幅減産しているという。

コバルトはアベノミクス効果などで需要回復に期待感

1~3月のコバルト国際相場はLow grade(99.3%品)が11~13ドル/lb、High grade(99.8%品)が11.5~14ドルと予想。足元価格(Low:11.75ドル、High:12.15ドル。ともにLMB中値)よりも強含むとみる。昨年9月中旬には13.4ドル(Low品の安値)を記録したが、これ以降は下げ相場に転じており、12月からはトレーダー筋の投げ売りで11ドルを下回る状況が続いている。しかし、年明け以降はアメリカの「財政の崖」、ヨーロッパの債務危機の影響が限定的だったうえ、中国の経済対策、日本の「アベノミクス」効果で需要回復に期待感が出はじめたのか価格は上昇し始めた。

DRCの精鉱輸出減が新規鉱山の増産分を相殺

需要面はヨーロッパやアメリカでのスーパーアロイ向けが安定。一方、車載(ハイブリッド車、電気自動車)用電池向けはリチウムイオン電池の搭載が当初計画よりも遅れており、需要回復にはまだ時間を要する。供給は、足元の価格では採算が合わないということでコンゴ民主共和国(DRC)からコバルト精鉱の輸出が減っている。このため新規鉱山の増産分が相殺され、コバルトの世界供給は当初見込みほど増えていない。